



岡山の弥生時代1 — 弥生の村と暮らし —



2019

岡山県古代吉備文化財センター

本書に登場する主な遺跡



- | | | | | |
|--------------------------|-------------------------|------------------------------|----------------------|----------------------------|
| ① つしま い せき
津島遺跡 | ② みなみがた い せき
南方遺跡 | ③ ひゃっけん がわ い せき ぐん
百間川遺跡群 | ④ かど た かい づか
門田貝塚 | ⑤ にしだん ち い せき ぐん
西団地遺跡群 |
| ⑥ みなみみぞ て い せき
南溝手遺跡 | ⑦ つ であ い せき
津寺遺跡 | ⑧ たて つぎ い せき
橋築遺跡 | ⑨ しょうとう い せき
上東遺跡 | ⑩ たね まつ やま い せき
種松山遺跡 |
| ⑪ かい がら やま い せき
貝殻山遺跡 | ⑫ ご まん ばら い せき
五万原遺跡 | ⑬ し みず だに い せき
清水谷遺跡 | ⑭ むま い せき
沼遺跡 | ⑮ の だ い せき
野田遺跡 |

目次

弥生時代の始まり

弥生時代とは	1
弥生時代の岡山	5

弥生時代の村

村の姿	8
住まいのようす	12

弥生時代の暮らし

水稲農耕	15
狩猟と漁労	21
暮らしの道具	24

見学できる遺跡と資料館

津島遺跡	29
門田貝塚	30
百間川遺跡群	31
貝殻山遺跡	32
野田遺跡	32
沼遺跡	33
上東遺跡	34
西団地遺跡群	35
五万原遺跡	35

トピックス

自然科学的年代測定法	4
弥生時代の自然環境を探る	11
稲穂をつむ道具	20

弥生時代とは

1 弥生土器の発見

1884（明治17）年、東京の本郷区向ヶ丘弥生町（現在の文京区弥生2丁目）にある向ヶ丘貝塚から、一つの土器が掘り出されました。ほぼ完全な状態でみつかったこの土器は、それまで知られていた縄文土器（貝塚土器）と比べるとたいへん均整のとれた形をしていて、文様による装飾が少ないという特徴をもっていました（図1）。このため、このような土器を、発見された地名をもとに弥生土器（弥生町式土器）と呼ぶようになりました。



図1 向ヶ丘貝塚の弥生土器

当初は、使用した民族の違いともいわれ、二種類の土器ですが、石を磨いてつくった磨製石器や銅剣・銅戈などの金属器が弥生土器と一緒にみつかることがわかってくと、製作した時代の違いと考えられるようになり、弥生土器が使われた時代を弥生時代と呼んでいます。

弥生時代は、その後の研究によって、遠賀川式土器と呼ばれる斉一的な土器が広がった前期、土器が多様な文様で飾られた中期、各地で特色のある土器がつけられた後期の3時期に区分されています。

2 弥生農耕の証明

弥生土器の中には稲もみのあとを残すものがあり、また弥生時代の遺跡からは炭化した米もみが見つかることから、この時代に農耕がおこなわれていたものと推定されていましたが、1936（昭和11）年に始まった奈良県唐古遺跡の発掘調査において、水田をたがやす鋤・鍬、稲もみの脱穀に用いる竪杵・臼といった木製農具が大量に出土し、弥生時代の水稻農耕が確かめられたのです。そして1947（昭和22）年には、静岡県登呂遺跡で実際に水田が見つかります。矢板で仕切られた水田の区画は1,000㎡にもおよび、弥生時代後期にはこうした大規模な水田が営まれていたことがわかってきました。さらに1968（昭和43）年には、岡山市津島遺跡で前期にさかのぼる水田が確認され、湿地を利用した粗放な稲作から、灌漑水路を伴う大規模な稲作へと発展していったようすが分かってきました。



図2 火山灰で埋もれた水田

しかし、1977（昭和52）年に群馬県日高遺跡で火山灰に埋もれた水田が見つかったのをはじめ（図2）、岡山県でも岡山市百間川遺跡群において洪水層の下から水田が発掘されるなど、各地で水田の調査があいつぐと、それまでとは異なる事実がわかってきました。その一つは、発見された水田が、いずれも土を盛り上げた畦^{あぜ}によって10～50㎡ほどに小さく区切られていたことです。大規模と思われていた登呂遺跡の水田区画も、実はその内部が土の畦によって細かく仕切られていたことが、最近の調査でわかりました。もう一つは、福岡県板付遺跡^{いたづけ}や佐賀県菜畑遺跡^{なばたけ}において、灌漑水路を伴う初期の水田が見つかったことです。朝鮮半島から伝わった当初から本格的な水稲農耕がおこなわれていたことが、この発見によって明らかとなりました。

3 水稲農耕の起源

水稲農耕は、弥生時代前期に朝鮮半島から伝わり、各地へ広まったと考えられてきました。ところが1978（昭和53）年、板付遺跡において縄文時代晩期末の土器をとともなう水田が見つかり、さらにその2年後には、菜畑遺跡で晩期後半にまでさかのぼる水田が確認されました。こうしたことから、水稲農耕の開始を弥生時代の始まりと考え、弥生時代^{もうき}早期を新たに設定する意見も出されています。しかし、この時期の水田は北部九州でしかみつかっておらず、稲作が本格的に広まったのが前期以後であることは確かなことのようにです。

なお、岡山県でも、総社市南溝手遺跡から出土した稲もみのあとが残る縄文土器や（図3）、岡山市朝寝鼻貝塚^{あさね}で確認された縄文時代にさかのぼる稲の細胞化石（プラントオパール）などが知られていますが、この時期に水稲農耕がおこなわれていたことを示す確かな証拠は、これまでのところみつかっていません。



図3 縄文土器の稲もみあと

4 弥生時代の年代

弥生時代中期～後期の年代は、九州において甕棺に副葬された中国製の銅鏡をもとに検討がおこなわれる一方、近畿では高地性集落や石製武器の発達を中国の史書に記された「倭国乱」と結びつける説が出され、双方の見解の間で100年ほどの差を生じていました。その後、日本にもたらされた中国の貨幣（貨泉・五銖銭、図4）などを手がかりとして比較検討



図4 高塚遺跡出土の貨泉

がおこなわれ、後期の始まりは1世紀前半であることが広く認められるようになりました。しかし、前期にはこのような中国製の遺物がみつかっておらず、約200年間とされる中期・後期の時間幅を参考として推定するにとどまっていた。

近年、弥生土器に付着したススや焦げついた炭化物について、放射性炭素14を用いた年代測定（AMS法）をおこなったところ、日本における稲作の始まりは、従来の想定より400年も古い、紀元前900年までさかのぼる可能性が示されました（図5）。しかし、これについては、ススという素材の問題や当時の放射性炭素濃度の問題などが指摘されており、いまだに研究者のあいだでも意見が分かれています。

年代	(従来の説)		BC		AD			
	500	300	100		100	300		
時代区分	(近年の説)		BC		AD			
	1000	700	400	200	200	300		
時代区分	弥生時代							古墳時代
	縄文時代	早期	前期	中期	後期			
岡山県内のおもな出来事と遺跡	イネの存在？ 南溝手遺跡	本格的な水稻農耕が始まる 津島遺跡	環濠集落の出現 清水谷遺跡 間 沢田遺跡	大規模な拠点集落の出現 門田貝塚 南方遺跡	集落が増加する 沼遺跡	高地性集落の出現 貝殻山遺跡	大規模な墳丘墓が築かれる 上東遺跡 榑築遺跡	各地との交流が盛んになる 津寺遺跡

図5 弥生時代の年表

自然科学的年代測定法

自然科学的な年代測定法にはさまざまな種類がありますが、弥生時代を対象とする場合、主として「放射性炭素年代法」と「年輪年代法」が利用されます。

放射性炭素年代法とは、大気や海洋中にごくわずかに含まれる放射性同位体「炭素14」が5,730年かけて半減する性質を利用し、遺物に残る炭素14の比率から年代を求める方法で、木材・骨・貝殻など、炭素を体に取り込んだ生物に由来する遺物に適しています。近年では、「加速器質量分析法」(AMS法)という技術の登場により、ごく微量の試料でも測定できるようになりました。ただし、大気や海洋中に含まれる炭素14の濃度は、時代や地域によって異なります。このため、正確な年代を知るにはさまざまな補正や換算が必要であり、現在もそのためのデータを整備・更新する作業が続けられています。



図6 放射性炭素年代法のしくみ

年輪年代法とは、年ごとの気候の違いによって増減する樹木の年輪幅を利用して年代を求める方法です。現在からさかのぼって、年輪幅の変化のパターンを樹種ごとに記録し、調べようとする同種木材の年輪幅の変化のパターンと比較・照合することで年代を特定します。しかし、この方法で得られるのは、あくまでも樹木が成長した年代であって、木材に加工された年代、さらには木材が埋まっていた遺跡の年代を直接示すものではありません。また、現時点では、年輪幅の変化を調べられている樹種がスギやヒノキなどに限られていることも難点です。

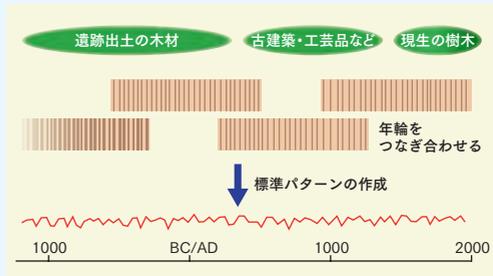


図7 年輪年代法のしくみ

自然科学的年代測定法は、考古資料の年代を知るための有効な手段ですが、正確な年代を測定するには適切な試料の選択が不可欠です。また、測定された年代は考古資料にとってどのような意味をもつか、よく検討する必要があります。さらに、今後の測定技術の向上によって、従来の年代値が見直されることもあるのです。

弥生時代の岡山

1 水稲農耕の伝来

弥生時代早期に北部九州で始まった水稲農耕は、前期になって瀬戸内海地域へ伝わりました。県内でもっとも古い弥生土器がみつまっている岡山市津島遺跡の周辺では、水稲農耕が伝わった当時、従来から住む縄文系の人々と新たにやってきた弥生系の人々が隣り合って暮らしていたのではないかとされています。また、津島遺跡では、朝鮮半島系の土器も出土していて（図8）、水稲農耕の伝播に重要な役割をはたした渡来人やその子孫が直接訪れたことも考えられます。実際、山口県土井ヶ浜遺跡では、渡来人と思われる人々を葬った墓地がみつまっているのです。



図8 朝鮮半島系の土器

水稲農耕を始めたころの集落は、自然堤防のような川沿いの小高い場所に営まれており、半地下式の竪穴住居や稲穂を収納する高床倉庫などが建てられました。百間川沢田遺跡や矢掛町清水谷遺跡では、まわりを濠でかこんだ環濠集落もみついています。低地に開かれた水田は畦で小さく区切られ、灌漑水路を設けて給水がおこなわれました。

2 拠点集落の形成

中期にはいると、大規模な集落が形成されるようになります。とりわけ、旭川の河口近くにあった岡山市南方遺跡では、隣接する絵図遺跡や上伊福九ノ坪遺跡などを含む東西約1kmの範囲に人々が集まり、大集落を形成しました。ここでは、石器や木器の生産がおこなわれたほか、遠方の品々も持ち込まれており、この地域における生産や流通の拠点として機能していたようです。

中期も終わりごろには集落の数が増加し、平地から離れた丘の上に営まれたものもあらわれます。吉備の内海に浮かぶ児島の岡山市貝殻山遺跡や倉敷市種松山遺跡は、標高200mほどの山上にあって、瀬戸内海を広く見通すことができます。北部九州



図9 丘の斜面に営まれた集落

と近畿を結ぶ瀬戸内海沿岸に点在するこのような高地性集落は、その立地から水上交通を監視し、情報を伝達する役割をになっていたものと考えられています。また内陸部でも、足守川や砂川を望む丘陵上に集落が多く見受けられますが(図9)、石製武器の増加・発達といった集団間の緊張関係を示すような証拠にとぼしく、人口の増加による耕地の減少や、気候変動にともなう生業の変化などから高所に住まいを移したのかもしれませんが。

3 王墓の出現

旭川と足守川の下流域では、後期になると、頸の長い壺と大形の器台に特徴づけられる上東式土器が用いられるようになり、のちに吉備と呼ばれる地域的なまとまりを形づくっていたようですがうかがわれます。このころ、南方遺跡はすでに姿を消しており、かわって足守川下流域に大規模な集落があら

われます。こうした集落では、銅鐸や銅鏡(図10)、銅釧のほか、青銅器の原料と思われる中国の貨幣(貨泉)がまとまって出土しています。足守川の河口近くに営まれた倉敷市上東遺跡では、港湾にかかわる施設がみつかったほかに、製塩に使用した土器も多量に出土していて、これらを利用した交易が盛んにおこなわれていたようです。

やがて、こうした集落を見下ろす丘の上に、全長約80mの墳丘をもつ倉敷市榑築遺跡が築かれます(図11)。当時最大規模となるこの墓では、中国や朝鮮半島に起源



図11 榑築遺跡の復元図



図10 足守川遺跡群の銅鏡

をもつ埋葬施設が採用され、他地域からもたらされた玉飾りや赤色顔料(水銀朱)がおさめられました。また、特殊器台・特殊壺と呼ばれる祭祀用土器は、のちに山陰や近畿などでも使用されます。ちょうどこのころ、足守川下流域では榑築遺跡の周辺に人々が集住する傾向が認められます。この墓に葬られた首長は、こうした集落を基盤として瀬戸内海の

海上交通を掌握し、交易を介して他地域にも影響をおよぼした有力者であったと思われる。

4 邪馬台国の時代

その後、足守川下流域では、四国・山陰・近畿・東海・北陸などの地域でつくられた土器が数多くもたらされるとともに（図12）、この地域の土器も各地へ運ばれるなど（図13）、相互に活発な交流がおこなわれていました。とりわけ、他地域の土器が集中する岡山市津寺遺跡では、柵でかこまれた施設のまわりに100軒あまりの住居が営まれており、



図12 各地から運ばれた土器

この地域の中核をなしていました。同様の遺跡は、奈良県纏向遺跡や愛媛県宮前川遺跡、福岡県西新町遺跡など、近畿から北部九州にかけて点々と知られており、盛んとなった交易の拠点として各地に整備されていったようです。こうした人々の交流が思想や習俗の同化をうながし、やがて近畿を中心とする政治的まとまり（倭国）の形成へとつながっていったものと思われます。3世紀ごろの倭人のようすを伝える「魏志倭人伝」には、邪馬台国を中心とする国々の集まりが形づくられていたことが記されています。邪馬台国の所在については諸説がありますが、近畿と考える人々のあいだでは、邪馬台国に次ぐ戸数の投馬国を、岡山県南部にあてる意見が有力です。



図13 岡山南部でつくられた土器の広がり

村の姿

1 農村の誕生

水稻農耕が伝わると、人々は水田に適した平地へ移り住むようになります。水路を掘削し、水田を開くには多くの人手が必要とされるため、川沿いの小高い場所（自然堤防）に集落を営みながら農業をおこなう共同体が形づくられたのです。住まいには、縄文時代に引き続いて**竪穴住居（竪穴建物）**が用いられる一方、穀物を保管する**高床倉庫（掘立柱建物）**が新たに設けられました。竪穴住居数軒と高床倉庫からなる津山市沼遺跡は、共同体を構成する最小単位の集団が残したものと考えられています。

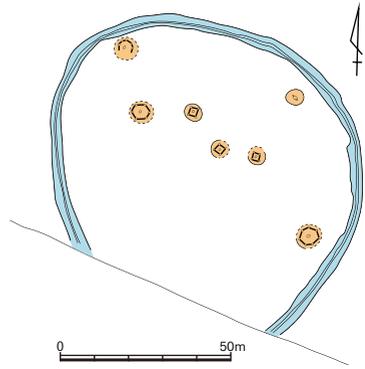


図14 百間川沢田遺跡の環濠集落

このころには、周囲を濠や土塁でかこんだ**環濠集落**もあらわれます。これは、水稻耕作とともに朝鮮半島から伝わった集落のつくりで、濠や土塁には、外敵や害獣の侵入を防ぐほか、特別な場所であることを示す役割があったようです。岡山県では、前期に営まれた岡山市**百間川沢田遺跡**や矢掛町清水谷遺跡の環濠集落が知られていますが、全貌が明らかとなった百間川沢田遺跡では、幅4m、深さ1.5mの濠でかこまれた東西90mの居住域から7軒の竪穴住居がみつかっています（図14）。しかし、中期から後期に発展した大阪府**池上曾根遺跡**や奈良県**唐古・鍵遺跡**、佐賀県**吉野ヶ**

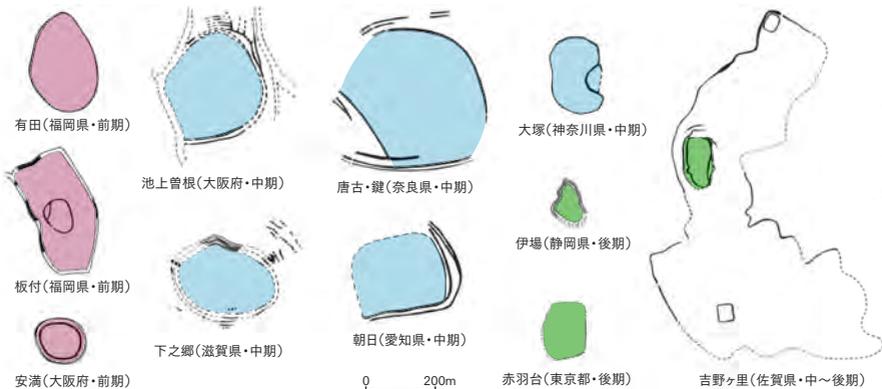


図15 各地の環濠集落（赤は前期、青は中期、緑は後期）

里遺跡と比べると、集落の規模ははるかに小さく（図15）、短期間のうちに姿を消しています。

2 大集落の形成

弥生時代中期になると、各地で大規模な集落があらわれます。池上曾根遺跡は、直径400～500mの範囲を何重もの濠でかこんでおり、その面積は約6万㎡にもおよびます。濠の内側からは、竪穴住居や掘立柱建物とともに、土器や石器、青銅器などの生産をおこなったあとがみつかったほか、各地から持ち込まれた品々



図16 復元された大形建物

が数多く出土し、生産や流通の拠点としての役割をはたしていたものと思われます。また、集落の中心には広場がおかれ、祭殿のような大規模な建物（図16）が設けられるなど、計画的な土地の利用がうかがわれ、「弥生都市」と評価する意見もあります。

岡山県でも、旭川の下流で大規模な集落がみつかっています。岡山駅の北側に広がる岡山市みなみがた南方遺跡は、弥生時代前期に始まる小規模な環濠集落でした。しかし中期になると、複数の自然堤防にまたがって竪穴住居や掘立柱建物、土坑墓どこうぼなどが数多く営まれ、大規模な集落を形づくります。ここからは、弥生土器をはじめ、石器・木器・青銅器・骨角器こつかくきといった多様な道具や、獣骨・貝殻などの食べかすが大量に出土しました。なかには、中国製の銅鏃（図17）や九州産の土器、南海産の貝を使用した腕輪のように、遠方から運ばれたものもみられます。また、石器や木器にはつくりかけのものも含まれており、ここでは材料の入手から加工、流通まで一貫しておこなわれていたようです。こうした拠点集落の周辺には小規模な集落もみられますが、営まれていた期間はごく短いようで、拠点集落と合併・分離を繰り返していたのかもしれない。



図17 中国製の銅鏃

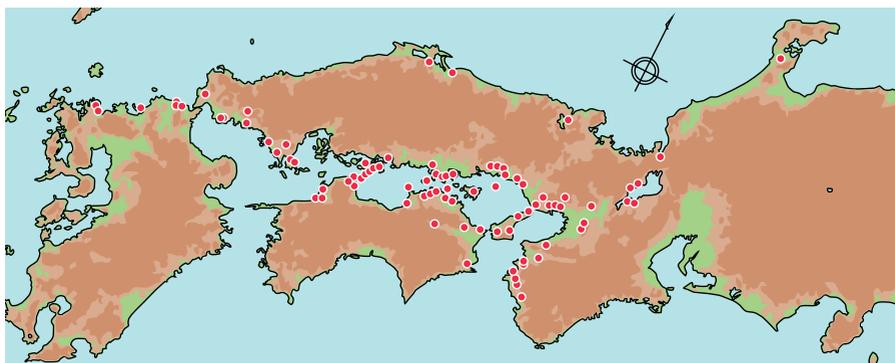


図18 高地性集落の分布（中期後半～後期初頭）

3 集落の変化

中期も後半になると集落の数は増加し、平地から離れた高い山の上にも営まれます。瀬戸内海に浮かぶ児島の岡山市貝殻山遺跡は、標高288mの山頂にあります。生活には不便な場所ですが、瀬戸内海や岡山平野を一望できる、たいへん見晴らしのよいところです。当時の瀬戸内海は、中国や朝鮮半島との窓口となった九州と近畿とを結ぶ重要な交通路でした。高地性集落と呼ばれるこれらの村は、瀬戸内海の交通を監視し、その情報を伝達する役割をはたしていたものと推定されています（図18）。

また、香川県紫雲山遺跡では、発達した石製武器が出土していることから、「後漢書東夷伝」にみえる倭国乱と結びつける意見も出されました（図19）。しかし、岡山県では、瀬戸内海沿岸を除いてこうした石製武器の発達には認められず、時期も2世紀のできごととされるこの争乱とは必ずしも一致していません。ちょうどこのころ、気候変動が生じたためか洪水が頻発していたようで、より安定した場所を求めて高所に住まいを移したのかもしれませんが。また、人口の増加や耕地の減少にともなって、新たな生活の場を丘陵上に求めたことも考えられます。

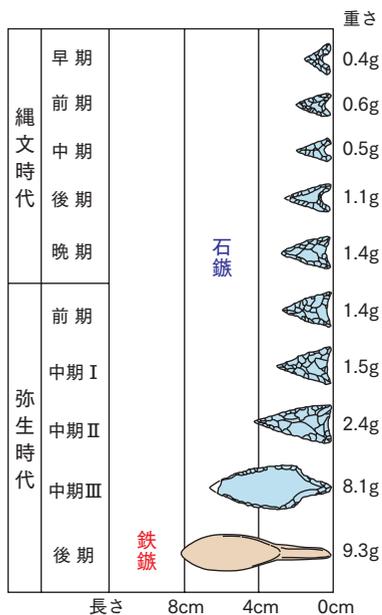


図19 重くなった鏃

4 抗争の始まり

後期になると近畿では、丘陵上の集落を大規模な濠で取りかこむ、大阪府古曾部・芝谷遺跡や観音寺山遺跡などがあられ、緊張関係の高まりがうかがわれます。鳥取県青谷上寺地遺跡では、殺傷痕を残す人骨がまとまってみつかっていて、争乱に巻き込まれた人びとの遺体と考えられています。クニ（国）としてのまとまりが形づくられる過程で、耕地や水、余剰生産物などを奪い合う戦いがおこなわれたのかもしれない。

トピックス

弥生時代の自然環境を探る

弥生時代における人と自然のかかわりを復元するために、遺跡に残されたさまざまな痕跡を手がかりとして、考古学と自然科学が協力しながら研究が進められています。

たとえば花粉分析や珪藻分析は、土層の中に残る花粉や珪藻の種類・量を調べて、当時の環境を復元する方法です。固有の環境のもとに生息する植物や珪藻の移りかわりからは、気候変動や人為的な環境改変などを読み取ることができます。

また、プラントオパール分析は、土層に含まれるイネ科やブナ科・シダ類などの植物細胞化石（珪酸体）を調べることにより、当時の植生復元や水田のような栽培遺構の推定、カヤやワラといった建築材の特定などをおこなっています。

このほか、動物・魚貝・昆虫などの遺骸はもとより、土層を構成する砂礫などにも、当時の自然環境を読み解くための情報がつまっています。今後も、新しい分析方法の開発によって、弥生時代の自然環境はより詳細に解明されていくことでしょう。



図20 津島遺跡の花粉

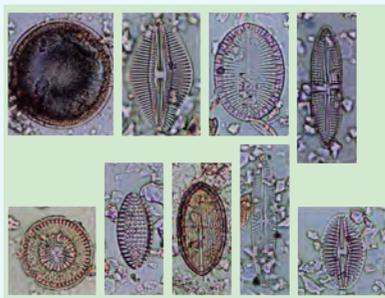


図21 津島遺跡の珪藻

住まいのようす

1 竪穴住居

弥生時代の人々は、縄文時代に引き続いて竪穴住居（竪穴建物）に暮らしていました。これは、地面を40～60cm掘り下げてつくった床に、穴を掘って4～8本ほどの柱を立て、地面まで葺きおろす屋根を支えた、半地下式の建物です。その姿は土器にかたどられているほか（図22左）、銅鏡などにも描かれています。

岡山県で見つかっている竪穴住居の平面形は、弥生時代を通じて円形が一般的ですが、終わりごろになると北部九州の影響を受け、しだいに方形へかわっていきます。その大きさは直径4～6mほどですが、なかには直径が10mをこえるものもあります。こうした大型の住居は、見晴らしのよい場所につくられていることが多く、有力者の住まいか集落の共用施設と考えられています。竪穴を掘削した土砂を周囲に盛り上げて土手（しゅうてい）を築き、雨水などの浸入を防ぐとともに、竪穴の深さを増して居住に必要な空間を確保しています。こうした竪穴の壁は、板や樹皮を編んだ網代などでおおい、段を刻んだ木製のはしごをかけて出入りしていました。屋内には、火を焚く炉や、雨水を排出する溝が設けられています。屋根にはカヤ（ススキ）や稲ワラなどの草が葺かれていましたが、夏の暑さや冬の寒さをさえぎり、雨もりを防ぐために、土でおおう場合があったようです。火災で焼け落ちた竪穴住居を発掘すると、炭になった屋根材の上に赤く焼けた土が広がっているようすがしばしば観察されます（図22右）。ところで、半地下式の竪穴住居は、高い湿度のために木材が傷みやすいのか、頻繁に建てかえられています。同じ場所で建てかえを繰り返している場合があり、集落の中で住む場所が決められていたのかもしれませんが、また、



図22
家形土器（左）と焼け落ちた竪穴住居跡（右）

建てかえに際して住居を大きくつくりかえている例も多く（図23）、直径4 mほどの小型から直径10mの大型へ改築したものもみられます。



図23 繰り返し建てかえられた住居跡

2 掘立柱建物

弥生時代の建物にはほかに、地面を床とした平地建物や、床を地面より高くした高床建物も使われていました。これらは地面に穴を掘って柱を立てることから掘立柱建物と呼ばれています。図24のように土器や銅鐸に描かれたほか、その姿をかたどった土器もつくられました。

平地建物は、まわりに柱を立てて壁をつくり、その上に屋根をかけていたものと思われます。柱穴は小さくて、その間隔もせまいことから、屋根や壁を草や網代などでおおった簡単な作りであったようです。このため、おもに作業場や物置小屋として使われたものと推定されています。

高床建物は、地面より高い位置に板を張って床を設けた建物で、長く太い柱を使用するためか、柱穴が大きく深いのが特徴です。風通しのよいこの建物は、壁を板でかこい、穀物などを収納する倉庫として使用されました。

また、床下にも草や網代で壁をつくり、作業場や物置場に利用する場合もあったようです。なお、岡山市津島遺跡では、弥生時代後期の川の中からみつかった建築材をもとに高床建物が復元されていますが、その特殊な作りから、有力者の住まいや儀式をおこなう特別な建物と考えられています。

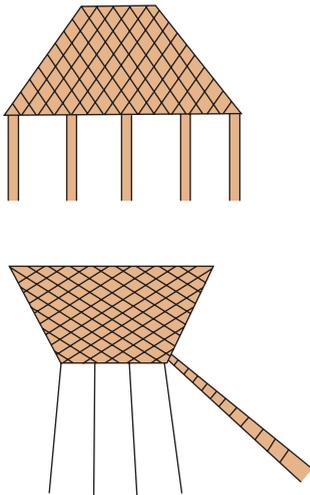


図24 描かれた平地建物（上）と高床建物（下）

3 貯蔵穴

貯蔵穴^{ちよぞうけつ}は、地面を掘ってつくった穴倉^{あなぐら}です。津山市二宮遺跡^{にのみや}や早島町奥坂遺跡^{おくさか}といった丘陵部の集落に多くみられますが、岡山市津寺遺跡^{ついでら}のような平野部の集落でもみつかることがあります。これらは、集落の一面にまとまって設けられる場合

と、竪穴住居のまわりにつくられる場合があり、管理の仕方が異なっているのかもしれませんが。上部に柱を立てて屋根をかけたもののほか、竪穴住居内に複数の貯蔵穴を設けて倉庫とした例もみられます。また、京都府あつえ温江遺跡の貯蔵穴では、出入りに使用したはしごが出土しています(図25)。



図25 貯蔵穴に残るはしご

弥生時代中期に、岡山地域でつくられ始めたころの貯蔵穴は、直径1m、深さ1mあまりの円筒形をしています。後期になると長さ2mをこえる箱形のものや、内部を大きく掘り広げた袋状のものもみられます。しかし、古墳時代にはいると、どういうわけか貯蔵穴はつくられなくなるのです。

貯蔵穴は、高床倉庫と同じように食糧たくわを貯えた施設と考えられていますが、両者がどのように使い分けられたのか、詳しいことはわかっていません。

4 井戸

地下水を得るために掘削された穴で、岡山市百間川遺跡群しかたや鹿田遺跡、倉敷市じょうとう上東遺跡といった、平野部でも地下水位の高い、河口近くの集落に多くつくられています。すり鉢形をした上部からしだいに穴をせばめ、地下水が湧き出る地層まで掘り下げていて、その深さは1～2mほどですが、鹿田遺跡のように3mにおよぶものもみられます。このように深い井戸では、壁がくずれるのを防ぐために木をく



図26 釣瓶に使った土器

りぬいてつくった井戸くわ枠すを据えていることがあります。また、水をくむ釣瓶つるべに使用された土器が、井戸の底からみつかることもあります(図26)。水が豊富な場所であるにもかかわらず、わざわざ井戸がつけられたのは、井戸水に特別な用途があったのかもしれませんが。

水稲農耕

1 開かれた水田

縄文時代の温暖な気候は、後期になると寒冷化に向かい、約3,000年前の瀬戸内海では水位が数mも低下したと推定されています（弥生小海退）。これによって大河川の下流では、土砂の堆積が急速に進み、安定した沖積地が形成されました。岡山県でも、旭川の下流に位置する半田山や操山のふもとに沖積地が広がり、そこには、ササやスキ・ヨシなどの腐植土がもととなった黒褐色の土壌が厚く形成されます。西方から伝えられた水稲農耕は、こうした肥沃な土壌を基盤に展開されることになったのです。平地に寄り集まった人々は、河川に沿って土砂が積もった小高い自然堤防（微高地）に集落を営み、その周辺の後背湿地や河川が埋まったくぼみ（旧河道）を利用して水田を開いていきました（図27）。

ところで水田は、地下水位との関係によって湿田と乾田に大別されます（図28）。地下水位が高い湿田は常に水につかっている、青灰色をした土壌（グライ土壌）は酸素不足の状態にあります。このため、稲の生育が悪く、生産性はあまり高くありません。これに対し、地下水位の低い乾田は、乾燥状態にあるため水路を設けて灌漑する必要があるものの、酸化により褐色となった土壌は生産性にすぐれ、現代の水田もほとんどが乾田です。

1968（昭和43）年、岡山市津島遺跡でみつかった弥生時代前期にさかのぼる水田は、自然堤防の周辺に広がる湿地を利用して営まれたものと推定されました。これは、静岡県登呂遺跡で知られていた後期の水田と比べるとたいへん粗末なものであったことから、弥生時代の水稲農耕は、湿地を利用した粗放な水田経営から灌漑水路

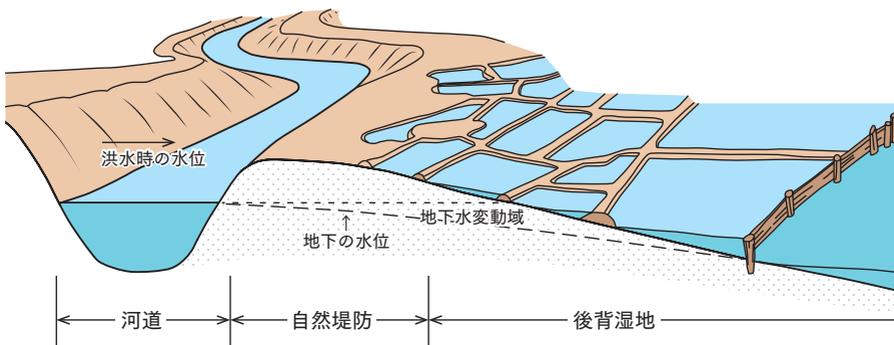


図27 弥生水田の立地

を備えた大規模な水田経営へ発展していったと考えられたのです。しかし、各地で弥生水田の調査が進むにつれ、前期においても灌漑水路をとまなう水田が営まれていたことがわかってきました。湿田と乾田は、水田を営む場所やその土壤に応じて作り分けられていたのかもしれない。

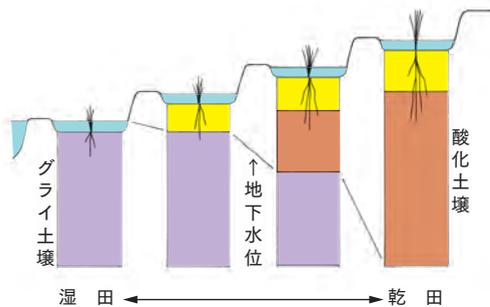


図28 地下水位と水田の型

2 水田を発掘する

弥生時代の水田を初めて確認した登呂遺跡では、畦を補強するために打ち込まれた矢板を手がかりとして、その全貌を明らかにしました。当時は土を盛り上げただけの畦をみつけだすなど思いもよらないことでした。ところが、火山の噴火や河川の氾濫などによって短期間のうちに埋もれた水田では、畦が良好な状態で保存される場合があることが明らかとなり、水田の調査方法が確立されていったのです。

水田の調査にあたっては、まず遺跡の一面を掘り下げて土層を観察し、水田土壌に特有の構造（酸化鉄の沈着や二酸化マンガンの集積など）がみられる層を探します（図29）。このとき、土層に含まれる稲の花粉や細胞化石（プラントオパール）を調べて、水田かどうか検討することもあります。水田と思われる土層が見つかったら、その10cmほど上まで全体を慎重に掘り下げます。そして、帯のようにのびる水田土壌の高まり（畦）を残しながらまわりの土を取り除き、水田の全体像を明らかにしていくのです。こうして、水田の構造や管理のようすを把握し、その経営の実態に



図29 水田層の観察

までせまることができるようになりました。

弥生時代の水田は、幅30cm、高さ10cmあまりの畦によって細かく区画されています。1区画あたりの面積は約10～50㎡と、現代の水田に比べてかなり小さく、形も不揃いになっています（図30）。水稻農耕では、水田区画全体が湛水するよう水平に造成しなければなりません、傾斜地

に広い水田区画をつくるには多大の労力と高い技術力が必要とされます。このため、小さな水田区画を階段状に造成することで、傾斜地に水田を開くことを容易にしたものと考えられます。

ところで、津島遺跡周辺の低地では、前期の水田が広い範囲で確認されているものの集落はほとんどみつかっていないことから、小規模な水田経営が長年にわたり繰り返されていたのかもしれませんが。岡山市百間川遺跡群でも、前期から中期にかけて河川が埋まった帯状のくぼみを利用し、短冊形の区画を階段状に連ねた小規模な水田経営がおこなわれていましたが、後期になると自然堤防上や後背湿地にまで水田造成を拡大し、方形をした大きな区画を東西約2.5 kmにわたり整然と並べた大規模な水田経営へと発展しています。その背景には、鉄器の普及による土木技術の向上とともに、100軒をこえる竪穴住居が示すような人口の増加があったものと思われる。



図30 小区画の水田

3 水を導く施設

水稻農耕では、河川から水を取り入れるための堰^{せき}や、その水を水田へ導くための水路も必要とされました。岡山市津島岡大遺跡^{つしまおかだい}でみつかった弥生時代前期の堰は、幅20mほどある川の流れをさえぎるように杭を打ち込んで水路に水を送っていました。岡山市田益田中遺跡^{たますたなか}でも、幅5mの川を横切るように打ち込んだ2列の杭に横木を



図31 田益田中遺跡の堰

渡して水位を上げ、水路に水を導いた後期の堰がみつかっています（図31）。

この遺跡ではまた、弥生時代前期の大規模な水路も確認されました。川のあとのくぼみを利用して設けられたもので、上幅は6mもあり、水を取り入れた川や水を送った水田などは確認されていないものの、総延長は600m以上におよぶものとみられ

ます。さらに、後期の百間川遺跡群では、水路を細かく枝分かれさせて広域に開かれた水田へ水を配っているようすがうかがわれます（図32）。こうして水田へ導かれた水は、高い区画から低い区画へと畦をこえて給水されました。

堰や水路といった灌漑施設の建設や維持には、高度な土木技術と安定した管理体制が必要であり、このころにはすでにそうしたものが備わっていたことがうかがえます。



図32 水田と併走する水路

4 稲株の痕跡か？

1980（昭和55）年、百間川原尾島遺跡の水田から、弥生時代末の洪水で埋まった直径5 cmほどの小さな穴が多数見つかりました（図33）。この穴の断面は同じ方向に傾いていて、洪水で倒れた稲の根株のあとに堆積した砂が入り込んだものと推定されました。その後、同様の穴は京都府内里八丁遺跡などでも確認され、稲株痕跡という見方が広まります。しかも、百間川原尾島遺跡の稲株痕跡は列をなすように並ぶことから、**田植え**をおこなったあとではないかと考えられたのです。

それまで、稲作の技術が未熟であった弥生時代は、もみを水田へ**直播**きして栽培したと考えられていたため、この発見は大きな反響を呼ぶことになりました。確かに、ある程度まで育てた稲を水田に移植する田植えは、雑草との競争に有利であり、直播きに比べて効率のよいやり方といえます。また、大足と呼ばれる木製の履物についても、田植え前の作業に用いられたという見方が出されるなど、弥生時代に田植えがおこなわれていた可能性を支持する意見が強まりました。

しかしながら、百間川原尾島遺跡の稲株痕跡は、畦の上にも広がっているうえ、その密度は1坪（約3.3㎡）あたり400株以上と、60株前後の現在に比べてあまりに高いなど、調査段階から疑問視する意見もありました。



図33 百間川原尾島遺跡の稲株痕跡

近年では、地震による土層の変形によってこのような穴が生じた可能性も指摘され、稲株痕跡と断定してよいのかどうか、さらなる検討が求められています。

5 稲作の道具

稲作には、水路の掘削・水田の造成から、水田の耕作・除草・稲の収穫にいたるまで、さまざまな道具が必要となります。

土をたがやすための道具には、振り下ろして使う鍬（図34-①）、スコップのように踏み込んで使う鋤（図34-②）があり、土木工事全般にも広く用いられました。このうち、ナスビ形農耕具（図34-③）と呼ばれるふたまた二又

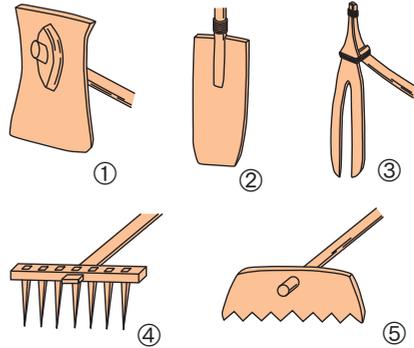


図34 土をたがやす道具

の鍬は、弥生時代中期の中部瀬戸内地域で作りだされたもので、その後各地に普及しました。このほか、水田の土を細かくくたくたのための代掻き（図34-④）や、水田の土を平らにならすためのえぶり（図34-⑤）も用いられています。これらの道具には、丈夫なカシ類の木材がおもに使われました。

岡山県南部では、後期以降、小さな鉄の刃先を装着した鋤や鍬が使用され始めます。鉄器の導入によって作業効率が向上したことで、自然堤防上にまで開墾がおよぶようになり、耕地面積の拡大にもつながったと考えられます。

収穫の道具には、稲穂をつみ取るための石包丁いしぼうちょうや、小型の鉄鎌てつがまが使用されました。

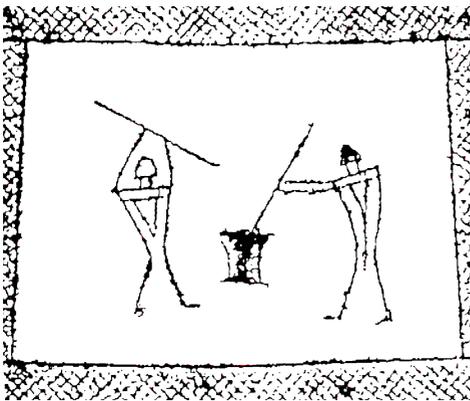


図35 銅鐸に描かれた脱穀のようす

収穫した稲穂を運搬する道具には、そりや田舟たぶねなどがありますが、県内での出土は知られていません。こうして収穫された稲穂は、高床倉庫などにおさめて保管され、必要に応じて脱穀がおこなわれました。脱穀には、木製の臼と堅杵が用いられていたようで、そのようすは銅鐸に描かれた絵画からも知ることができます（図35）。

稲穂をつむ道具

弥生時代の稲は、種子の熟す時期にばらつきがあったため、熟した稲穂だけを選んでつみ取る必要がありました。こうした収穫作業には、主として石包丁と呼ばれる石器が使用されました。

水稻農耕とともに大陸から伝わった石包丁は、石を磨いてつくった半円形ないし紡錘形ぼうすいの扁平な石器で、片側の縁をとがらせて刃としてしています。収穫作業の際には、中央の2つの穴に通したひもを指にかけて、稲穂をつみ取りました。こうした石包丁の材料には、板状に割れやすい粘板岩ねんばんがんや結晶片岩けっしょうへんがんなどがよく使われました。また、地域によっては、木や貝殻でつくった穂つみ具も用いられています。

岡山県を含む中部瀬戸内地域では、初めは磨製の石包丁が使われていましたが、中期以降になると、香川県でとれる安山岩あんざんがん（サヌカイト）を打ち欠いてつくった打製の石包丁が広く使用されるようになりました（図36・37）。鉄器が普及した後期には、稲穂をつむ道具も鉄鎌にかわりますが、山間部では鉄器の入手が困難であったのか、引き続き石包丁が使用されています。



図36 磨製石包丁(上)と
打製石包丁(下)



図37 打製石包丁の使い方

狩猟と漁労

1 自然の恵み

水稻農耕が本格的に開始された弥生時代以降も、狩猟・漁労・採取活動は、食糧確保のため盛んにおこなわれました。

岡山市津島遺跡では、弥生時代後期のさまざまな動物遺体が出土しており、当時の食糧事情がうかがえます。イノシシ、シカ、カモ、キジ、エイ、サメ、スズキ、タイ、ウニ、シジミ、カキ、ハイガイなど豊富な内容で、これらすべてが食用にされたとは断定できませんが、身近にこのような動物が生息し食糧源となったことが想像できます。

2 鳥獣を狩る

弥生時代に、動物をとらえる方法としてもっとも多く使われたのは弓矢です。弓矢を用いて狩りをするようすは、銅鐸の絵画などにも描かれています。

弓は木製のため、残っていることはまれですが、岡山県でもいくらか例があります。岡山市南方遺跡からは多数の弓が出土しており、そのうち完全な形で見つかった1点は、全長約160cmで人の背丈ほどの長さがあります。津島遺跡出土の弓は、折れているため全長はわかりませんが、表面を黒漆と朱漆で塗りわけた装飾性のあるもので、狩猟具というよりも武器として使われたものかもしれません。

一方、矢の先に付けた鏃^{やじり}は、弥生時代の遺跡から非常に多く出土します。サヌカイトなどの石を打ち欠いてつくった石鏃^{せきざく}が多くみられますが、しだいに鉄鏃^{てつざく}や銅鏃^{どうざく}にかわっていきます(図38)。

弓と同様に、狩猟だけでなく戦いに用いられたものもあつたと考えられます。

そのほか、石を投げつけて獲物にあてるといった狩りの仕方も考えられ、「つぶて」と思われる石が出土することもあります。

また、津島遺跡ではイヌの骨が多数出土しており、食用のほか、猟犬として利用され



図38 百間川遺跡群の石鏃(右)・鉄鏃(左)・銅鏃(上)

たことも考えられます。

3 魚貝をとる

弥生時代の漁労活動としては、縄文時代に引き続き、網漁や釣漁などがおこなわれました。網や釣糸は有機質のため残っていませんが、それらを水中に沈めるための錘おもりが数多く出土しています。錘には、土でつくった焼きものの土錘どすいと石でつくった石錘せきすいがあります（図39）。1か所から多数の錘がまとまって出土することもあります。それらは刺し網さしみや投網なみに使われたものと考えられます。また浮子うきは、木や軽石でつくられていました。

釣りに用いられた釣針は、動物の骨角や牙きば、鉄などでつくられたものがみられます。岡山県でみつかった例は多くありませんが、倉敷市種松山遺跡からは骨角製の釣針、岡山市百間川原尾島遺跡からは鉄製の釣針が出土しています。

また、南方遺跡や津島遺跡では、タモ網の網枠もみつかっています。木の枝をたわめて輪をつくり、網を結ぶための小さな穴があげられています。

網漁・釣漁のほかに、ヤスやモリを使って魚などを突き刺し、とらえることもありました。ヤスが手に持ったまま突くのに対し、モリは遠くへ投げて使用します。岡山市郡貝塚こおりからは骨角製のモリ、南方遺跡からは木製のヤスが出土しています。

そのほか、竹や木の枝を編んだ籠かごを水中に沈めて魚をとる筥うばも用いられました。大阪府山賀遺跡の川のあとからほぼ完全な形でみつかったものは、直径約30cmある入口の内側に返しをつけています（図40）。

また、漁労活動には舟も使われており、津島遺跡や南方遺跡では舟をこぐための櫂かいが出土しています。



図39 百間川遺跡群の石錘
(中央のくぼみに網の一部を結ぶ)

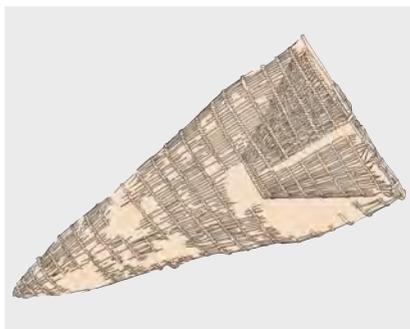


図40 山賀遺跡出土の筥

4 塩づくり

海水を土器で煮つめて塩をつくる**土器製塩**は、関東・東北の太平洋沿岸で縄文時代後期からおこなわれていましたが、その後、途絶えてしまいます。再び土器製塩が始まるのは、弥生時代の瀬戸内海地域でした。

瀬戸内海に浮かぶ児島（現在の児島半島）では、倉敷市仁伍遺跡や城遺跡などの集落から、中期にさかのぼる**製塩土器**がみつかっています。それは、口が上へ大きく開く形をしていて、底には円筒形の台がついています。外側をヘラで削って土器を薄く仕上げていますが、これは炎の熱を効率よく伝えて海水を煮つめるための工夫とみられます。ただし、今のところ製塩をおこなった炉はみつかっておらず、出土する製塩土器も少ないことから、生産の規模はそれほど大きくなかったのかもしれないと推測されます。

土器製塩が盛んにおこなわれるようになるのは後期のことで、河口近くに営まれた百間川原尾島遺跡や倉敷市**上東遺跡**では、土器製塩をおこなった炉がみつかっています（図41）。これは、長さ1～2mの長方形に掘りくぼめた穴の底に粘土を敷いて、地下の湿気を遮断するとともに、熱を逃がさないようにしたものです。周辺からは、しみ込んだ海水が結晶化して細かくくだけた製塩土器のかけらが大量に出土しました。このころの製塩土器は中期のものより小さくなっていて、炉内にたくさん並べた製塩土器に海水を小分けにして煮つめていたようです（図42）。

こうしてつくられた塩は、製塩土器に入れて運ばれたようで、岡山市津寺遺跡や津島遺跡など岡山平野の集落から数多くみつかっています。また、瀬戸内海の水運により各地へ運ばれたことも考えられ、吉備における重要な交易品の一つであったものと思われます。



図41 上東遺跡の製塩炉



図42 再現した土器製塩

暮らしの道具

1 食事の道具

弥生時代には、食事や食物の調理・貯蔵のためにさまざまな道具が用いられました。その中心的な役割をはたしたのが弥生土器です。弥生土器は、それまでの縄文土器と比べると、たいへん整った形をしています。これは、弥生土器が回転を利用してつくられたことによるものです。弥生土器の製作にあたっては、まず、砂礫などを加えて成分を調整した粘土をひも状にのびし、輪のように積み上げて土器の形をつくります。このとき、板や革かわなどを使って表面の凹凸おうちをならし、粘土ひもを密着させます（図43）。そして、回転を利用して土器の形を整えていくのです。中国・四国地域では、後期になると土器の内側をヘラで削って薄くするつくり方が普及しました。また、瀬戸内海沿岸部では、板でたたきしめて土器をつくる方法もおこなわれました。こうしてつくられた弥生土器



図43 土器づくりのようす

は、乾燥させたあとに草木などの燃料でおおい、さらに泥どろなどをかぶせて野焼きをしていたようです。岡山市百間川原尾島遺跡や総社市南溝手遺跡では、弥生土器を

焼き上げたあとと思われる穴がみつかっています（図44）。

弥生土器はまた、用途に応じてさまざまな形につくられました。口が小さくすばまった壺は、ものを貯えるのに適した形をしています。ていねいなつくりで、文様を飾ることが多いうえ、前期の壺にはしばしば蓋ふたがともないます。口が大きく開いた甕かめは、壺に比べると粗雑なつくりで、外側にススが付着していることから



図44 百間川原尾島遺跡の弥生土器を焼いた穴

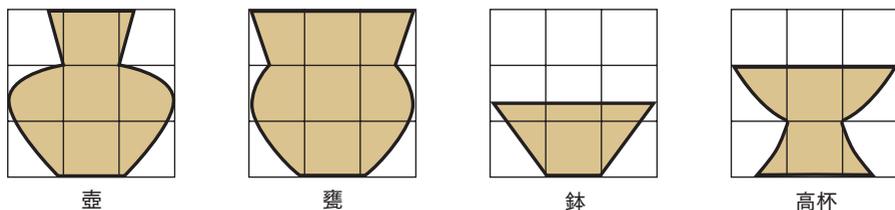


図45 弥生土器の形

煮炊きに用いられていたようです。ポウルのような形をした鉢や高い台をつけた高杯は、食事の盛りつけに使用したもので、「魏志倭人伝」にも「食飲には籩豆（高杯）を用い、手食す」とあります。

弥生時代前期に北部九州で使われた遠賀川式土器は、水稻農耕の技術とともに各地へ伝えられました。比較的単純な形をしていて、ヘラで描いた文様や粘土ひもを貼りつけた文様で飾られていました。中期になると、土器の種類が増えるとともに、櫛のような道具を使用した櫛描文や、革・布を押しつけて筋状にへこませた凹線文など、回転を利用してつけた文様で飾られるようになります。そして後期には、各地で独自の形をした土器が作られました。岡山県でも、旭川や足守川の下流域では、長い頸をもつ壺とそれをのせる大形の器台に特徴づけられる上東式土器が使われました。また、中国山地では、山陰とよく似た土器が用いられます。このように個性的な形をした土器の広がりには、中国の史書に国と記されたような地域的まとまりを反映した

前期



中期



後期



図46 岡山県南部の弥生土器

2 布づくりの道具

弥生時代には、朝鮮半島から機織りの技術が伝わりました。機織りとは、織機にたくさんの経糸を張り、その上下へ緯糸を交互に通すことで布をつくる技術です。縄文時代以前の布づくりは、何本もの糸を交差させて編み込んでいくため、目の細かい布をつくるにはたいへん手間がかかりました。そこで、機織りが布づくりの中心をになうようになったのです。

織機はいくつかの部品でできていますが、弥生時代の織機にはこうした部品を固定する台がなく、織り手の腰と足で機を支えていました(図49)。このため、あまり大きな織機は使えないことから、織りあがる布も幅約30cm、長さ2～3m程度のものであったようです。織機の部品は木でつくられているため、遺跡からみつけることはまれですが、南方遺跡では織りあがった布を巻き取る部品が出土しています。

また、機織りでは切れにくくからまな

い糸も必要でした。麻などの茎に含まれる繊維をいくつもつなぎ、撚りをかけながら紡錘に巻き取ることで太さが一定で丈夫な糸にしていました。紡錘のおもり(紡錘車)には、石や焼きものでつくった円板のほか、土器のかげらを加工したものが使われていました(図50)。これらは住居からみつけることが多く、糸づくりや機織りは家ごとにおこなわれていたのかもしれない。

なお、佐賀県吉野ヶ里遺跡や鳥取県青谷上寺地遺跡では絹の断片もみつかっており、養蚕による絹糸づくりがおこなわれていたことも考えられます。

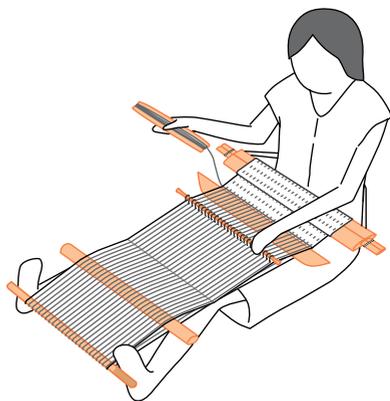


図49 弥生時代の機織り



図50 糸をつむぐ紡錘

3 加工の道具

稲作の技術とともに、農具などをつくるための道具が朝鮮半島から伝えられました。これらは石を磨いてつくった刃先が用いられており、大陸系磨製石器と呼ばれています。

樹木の伐採に使用した大型蛤刃石斧は、丸い棒状の石の先に両刃をつけたものです。縄文時代の石斧と比べると、大形で重量もあることから、かたい樹木でも効率よく伐り倒すことができました。角張った石の先に片刃をつくり出した石斧には、扁平片刃石斧と柱状片刃石斧があります。いずれも木材を削ったりくりぬいたりするような加工に使われました(図51)。

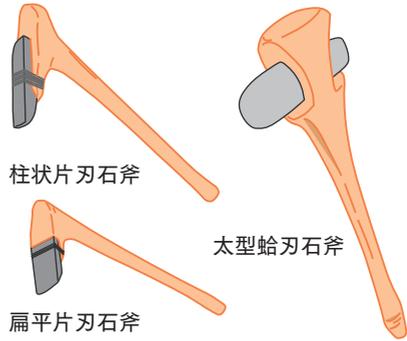


図51 弥生時代の磨製石斧

弥生時代にはまた、鉄の刃先をつけた道具も使われました。これらには、樹木を伐採する斧や、木材に穴をあけたり溝を掘ったりする鑿、木材の表面を整える鉋、細かな切削加工をおこなう刀子など多様な工具があります(図52)。こうした鉄製工具の使用によって、複雑で精巧な木製品をつくることのできるようになったのです。しかし、鉄の加工には高度な技術を要することから国内での生産がむずかしく、もっぱら朝鮮半島からの輸入に頼っていました。このため、朝鮮半島に近い北部九州では中期初頭に鉄器の使用が始まるものの、岡山県では中期中頃までおくれ、中国山地では後期後半にいたっても石器が併用されました。使われ始めたころの鉄器は、朝鮮半島でつくられた製品のかげらを利用して、鑿や鉋などの加工具に用いられていましたが、鉄器の流通量が増加した後期になると、伐採用の斧のほか、稲穂をつむ鎌などの農具にも使用されました。

岡山市津寺遺跡や倉敷市矢部南向遺跡といった足守川流域の集落では、こうした鉄器が多く出土しているほか、岡山市津寺一軒屋遺跡のように鉄を熱して加工する鍛冶のあとみつかっていて、瀬戸内海の水運を通じて豊富な資材や高度な技術がもたらされていたようです。

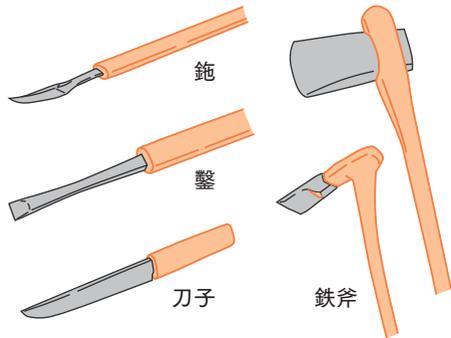


図52 弥生時代の鉄製工具

見学できる遺跡と資料館

つしまいせき 津島遺跡 (国指定史跡)

岡山市北区いずみ町

岡山県総合グラウンド一帯に広がる集落遺跡です。1968（昭和43）年の武道館建設にともなう発掘調査によって弥生時代前期の集落と水田がみつき、稲作が始まったころのようすを物語る貴重な遺跡として国の史跡に指定されました。また、2000（平成12）年の国体会場整備に伴う発掘調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が見つかったほか、弥生時代の川のなかから当時の生活をしのばせる土器や石器、木製品などが大量に出土しました。

現在、「やよい広場」として整備した史跡指定地には、竪穴住居や高床倉庫などの建物とともに、水田や湿地といった周辺の環境も復元し、歴史教育や体験学習の場として活用されています。また、ここから出土した遺物のおもなものは、陸上競技場メインスタンド1階に設けた「遺跡&スポーツミュージアム」でみることができます。



遺跡&スポーツミュージアム

【所在地】 岡山市北区いずみ町2-1

【開館時間】 9:00～16:30

【入館料】 無料

【休館日】 月曜日(祝日の場合は翌日)・
年末年始・催し物開催日等

【問い合わせ】 086-255-7300

【HPアドレス】 <http://www.pref.okayama.jp/page/434449.html>



吉井川下流の自然堤防上に営まれた集落遺跡です。かねてから弥生時代の貝塚として知られており、そこからみつかった前期後半の弥生土器は「門田式」と呼ばれていました。その後におこなわれた発掘調査によって竪穴住居が確認されたほか、蛇行しながら流れる溝がみつかり、貝塚はこのなかに形成されていたことも明らかとなりました。出土品には石包丁や石鏃、釣針などが含まれていて、稲作とともに狩猟や漁労をおこなって暮らしていたようすがうかがわれます。

1985（昭和60）年には国の史跡に指定され、竪穴住居や貝塚の一部が復元・整備されました。近くの瀬戸内市民図書館「もみわ広場」では、土ごととはぎ取られた貝塚の断面を見学することができます。



瀬戸内市民図書館 もみわ広場

- 【所在地】 瀬戸内市邑久町尾張465-1
- 【開館時間】 10:00～18:00(火・水・土・日・祝)
10:00～19:00(木・金)
- 【入館料】 無料
- 【休館日】 月曜日(祝日の場合は翌日)・
年末年始・毎月最終水曜日等
- 【問い合わせ】 0869-24-8900
- 【HPアドレス】 <https://lib.city.setouchi.lg.jp/>



百間川遺跡群は、旭川の放水路として江戸時代につくられた百間川沿いに広がる、複数の遺跡（原尾島、沢田、兼基・今谷、米田ほか）の総称です。発掘された遺構・遺物は弥生時代の各期にわたりますが、なかでも注目されるのは、原尾島遺跡から今谷遺跡にいたる約2.5kmの範囲でみつかった弥生時代末の水田です。洪水の土砂によって埋もれていたこの水田は、畦や水路などの施設が良好に残り、弥生時代における稲作技術の解明に重要な役割をはたしました。また、おびただしい竪穴住居が発見された原尾島遺跡は、この地域の拠点的な集落であったと考えられています。

河川改修工事がおこなわれた現在では、発掘された遺構をみることはできませんが、沢田地区の百間川緑地公園に竪穴住居の輪郭が復元表示されており、その大きさを体感できます。また、出土品の一部は、岡山県古代吉備文化財センターに展示しています。



岡山県古代吉備文化財センター

- 【所在地】 岡山市北区西花尻1325-3
- 【開館時間】 9:00～17:00
- 【入館料】 無料
- 【休館日】 年末年始(臨時休館あり)
- 【問い合わせ】 086-293-3211
- 【HPアドレス】 <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>



この遺跡は、児島半島の東端にそびえる標高288mの貝殻山山頂にあります。発掘調査によって、弥生時代中期の竪穴住居や地名のもととなった貝塚が見つかり、稲作や魚貝の採取などをおこなって暮らしていた人々の生活あとであることがわかりました。瀬戸内海や岡山平野を一望できる立地から、海上交通を監視し、その情報を伝達する役割をになっていたものと推定され、岡山県を代表する高地性集落として広く知られています。現在、貝殻山一帯は瀬戸内海国立公園に指定され、観光スポットとしても親しまれています。



の だ い せ き
野田遺跡 (奈義町指定史跡)

奈義町中島東

那岐山南麓のなだらかな扇状地に営まれた弥生時代中期後半の集落跡です。1951(昭和26)年におこなわれた発掘調査で、竪穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴が確認され、弥生集落の一端が明らかとなりました。その後、西側に畜舎の建設が計画されたことから、改めて発掘調査がおこなわれましたが、ここでは竪穴住居とともに平地住居とみられる掘立柱建物が数多くみつかって注目されました。

県内ではじめて本格的な調査がおこなわれた集落遺跡として町の史跡に指定され、その一面に記念碑が建てられています。



津山市街地北郊の丘陵上にある、弥生時代中期後半の集落遺跡です。1952（昭和27）年から数回にわたっておこなわれた発掘調査によって、竪穴住居や高床倉庫などからなる集落の全体像が明らかとなりました。これは、生活や生産の単位となる集団が営んだものと推定され、古代集落の研究に大きな影響を与えました。また、1957（昭和32）年には、焼け落ちた竪穴住居の炭化材をもとに当時の姿が復元され、岡山県では初めてとなる史跡公園として整備されました。

隣接する津山弥生の里文化財センターには、集落の全景や稲作のようすなどがジオラマで紹介されているほか、弥生土器や石器、鉄器などの出土品が展示されています。また、近・現代の農具も展示されており、弥生時代に始まった農業の歴史を学ぶことができます。



津山弥生の里文化財センター

- 【所在地】 津山市沼600-1
- 【開館時間】 9:00～17:00
- 【入館料】 無料
- 【休館日】 月曜日・祝日の翌日・年末年始
- 【問い合わせ】 0868-24-8413
- 【HPアドレス】 <https://www.city.tsuyama.lg.jp/life/index2.php?id=3436>



倉敷市の北東を流れる足守川の西岸一帯では、水田の下から弥生土器を出土することが知られていました。掘り出された土器は、この地域における弥生時代後期の特徴を示すものとして、地名をもとに上東式土器と名づけられました。1970（昭和50）年から山陽新幹線や都市計画道路の建設に先立っておこわれた発掘調査では、竪穴住居や井戸、製塩炉などがみつき、弥生時代～古墳時代の集落遺跡であることが明らかとなりました。さらに、その後の調査で、河口近くに築かれた突堤が確認され、弥生時代の船着き場と考えられています。この周辺からは中国の貨幣や朝鮮半島系の土器が出土していて、対外交流の窓口のような役割をはたしていたようです。

現在、突堤がみつかった場所には説明板が設置され、発掘当時のようすを知ることができます。また、上東式という名前のもととなった弥生土器は、倉敷市の文化財指定を受け、倉敷埋蔵文化財センターに保管されています。



倉敷埋蔵文化財センター

【所在地】 倉敷市福田町古新田940

【開館時間】 9:00～17:15

【入館料】 無料

【休館日】 月曜日(祝日の場合は翌日)・
年末年始

【問い合わせ】 086-454-0600

【HPアドレス】 http://www.kurashiki-oky.ed.jp/lpk-maizo-bunkazai-c/index_2_2_2.html



総社市西部を流れる新本川を北に見下ろす丘陵上にあります。水島機械金属工業団地（西団地）の建設にともなって発掘調査がおこなわれ、弥生時代中・後期の集落や、横穴式石室をもつ古墳、飛鳥時代の製鉄炉・製炭窯などがみつかりました。とりわけ、飛鳥時代の製鉄炉は62基を数え、このころ盛んにおこなわれた製鉄のようすをすることができます。

現在、工業団地の一面に遺跡公園が整備され、復元された弥生時代の高床倉庫や飛鳥時代の製鉄炉・製炭窯などを見学することができます。



ごまんばらいせき
五万原遺跡 (井原市指定史跡)

吉備高原の南縁にあたる標高400mの丘陵上に営まれた弥生時代後期の集落跡です。

1965（昭和40）年から二次にわたって発掘調査が実施され、3軒の竪穴住居がみつかりましたが、そのうちの1軒に残る焼け落ちた建築材をもとに建物の復元がおこなわれました。

現在も、中世の町並みを再現したテーマパーク「中世夢が原」の一角に建つ竪穴住居と高床倉庫をみることができます。

（中世夢が原：木曜日・祝日の翌日・年末年始休み、一般500円、小学生300円。12～2月は一般も300円）



■挿図出典・提供

- 図1：東京大学総合研究博物館提供
図2：群馬県教育委員会提供（群馬県日高遺跡）
図9：赤磐市教育委員会提供（赤磐市用木山遺跡）
図11：安川満氏提供
図13：次山淳2007「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』第54巻3号（一部改変）
図15：滋賀県立安土城考古博物館編1998『ムラの変貌 稲作と弥生時代』（一部改変）
図16：和泉市教育委員会提供（大阪府池上曾根遺跡）
図17：岡山市教育委員会提供
図18：柴田昌児2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』10 小学館（一部改変）
図22左：総社市教育委員会提供（総社市横寺遺跡）
図24：大阪府立弥生文化博物館編2002『王の居館を探る』（一部改変）
図25：京都府埋蔵文化財調査研究センター提供（京都府温江遺跡）
図27：田崎博之1989「地形と土と水田」『古代史復元』4 講談社（一部改変）
図35：国立歴史民俗博物館編1995『銅鐸の美』毎日新聞社
図40：大阪府教育委員会編1984『山賀（その3）』（一部改変）
図45：江坂輝彌編1973「縄文土器と貝塚」『古代史復元』5 講談社（一部改変）
図47：岡山市教育委員会提供
上記以外：岡山県古代吉備文化財センター所蔵・作成

■参考文献

全般

- ・佐原真1987「日本人の誕生」『体系日本の歴史』1 小学館
- ・田中琢1991「倭人争乱」『日本の歴史』2 集英社
- ・寺澤薫2000「王権誕生」『日本の歴史』2 講談社
- ・松木武彦2007「列島創世記」『日本の歴史』1 小学館

弥生時代の始まり

- ・春成秀爾1990「弥生時代の始まり」『UP考古学選書』11 東京大学出版会
- ・酒井龍一1997「弥生の世界」『歴史発掘』6 講談社
- ・近藤義郎・河本清編1987「吉備の考古学—吉備世界の盛衰を追う—」福武書店
- ・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編2016「吉備の弥生時代」吉備人出版

弥生時代の村

- ・下條信行編1989「弥生農村の誕生」『古代史復元』4 講談社
- ・佐原真編1986「豊穡の大地」『日本古代史』5 集英社

弥生時代の暮らし

- ・工楽善通1991「水田の考古学」『UP考古学選書』1 東京大学出版会
- ・工楽善通編1989「弥生人の造形」『古代史復元』5 講談社
- ・上原真人・白石太一郎ほか編2005「暮らしと生業」『列島の古代史』2 岩波書店

■協力者・協力機関（敬称略）

安川満・次山淳・柴田昌児・田崎博之・岡山市教育委員会・倉敷埋蔵文化財センター・赤磐市教育委員会・総社市教育委員会・瀬戸内市民図書館・津山弥生の里文化財センター・京都府埋蔵文化財調査研究センター・和泉市教育委員会・東京大学総合研究博物館・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査研究事業団



遺跡で学ぶ岡山の歴史

岡山の弥生時代1 - 弥生の村と暮らし -

■編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3

TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

■発行日

平成31年2月12日